

「さあ、もういかなくちゃ。仕事に遅れちゃったら大変だ。」

ジムはにっこり笑うと、大急ぎでその場を立ち去って行きました。

牧師はジムがいつもするように、祭壇の前にそっとひざまづきました。

こんなことをするのは初めてでした。彼の冷えていた心はときほぐ

され、イエスの愛で満たされていくのがわかりました。

頬を涙が伝うのもかまわず、彼は小さな声でジムの祈りを繰り返して
てみました。

「神様、これが言いたくてまた来ました。

あなたが私の罪を取り除いてくださって以来、私はずーっと嬉しく

て仕方がないですよ。あなたが私の大親友になってくださって、

すごく嬉しいのです。どうやって祈ったらいいのか

あんまりよくわからないのですが、とにかく

神様のこと、毎日思っています。

だから、イエス様、私です、

顔を出しに来ました。」



ある日の午後、牧師はまだジムがその日は来ていないことに気が

きました。そしてジムが現れない日は何日も続きました。

心配した牧師がついに工場へ行きジムのことを尋ねると、

ジムは病気で入院していたのです。

病院では医者や看護婦たちがジムのことを噂していました。

彼には花はおろか、電話一本、カードの一通も送られてこない、

見舞客も一人も来ない、それなのに、ジムはいつも笑顔で喜び一杯

なのです。しかも彼の喜びは回りにいる人達にも伝染して、ジムが

入院して以来、その病棟の雰囲気が一転してしまったのです。

病院にかけつけた牧師は、ベッドに横たわっているジムのかたわら

に立ち、言いました。

「看護婦さんたちは皆んな不思議がっていますよ。

付き添いも見舞いも全然ないのに、あなたがいつも嬉しそうに

ニコニコしているから。」



「^{かんこふ}看護婦さんたちは^{まちが}間違えているんですあ！」

まあわからないのも無理はないですがね。^{まいにち}毎日、^{ひる}昼になるとね、
あの方が^{かた}来て^き下さる^{くだ}んですよ。おいらの^{だいしんゆう}大親友のあの方が。
^{ぼくし}牧師さんならわかるでしょう？
あの方がね、ほらここ、^{すわ}ここんどこに座って、おいらの^て手を^{にぎ}握ってね、
こういうふう^いに言ってくれるんですよ。」

^{かれ}彼は^{きょうかい}教会からやや離れた^{はな}工場^{こうじょう}で働^{はたら}いているのですでした。

^{ぶん}30分^{ひるやす}だけの昼休みを利用して、^{りよう}力^{ちから}と^{げんき}元気を得るために、^{まいにち}毎日
そこに^{いの}祈りに^き来ていたのです。

「ほんのちょっとしかいられないんですがね、なにしろおいらが^{はたら}働い
ている工場は、この^{こうじょう}教会からは^{きょうかい}ちょっと離^{はな}れているもんで。ここに
こうして^{かみ}ひざまづいてね、^{ぐあい}神さんにこんな具^{いの}合に祈る^{いの}んですさあ。

『^{かみ}神さん、これが^い言いたくて、^きまた来^きました。

あなたが^{つみ}おいらの罪^とを取り除^{のぞ}いてくださって以来、^{いらい}おいらは
ずーっと^{うれ}嬉しくて^{しかた}仕方がないんですよ。

あなたが^{だいしんゆう}おいらの大親友になっ^{うれ}てくださって、すぐ^{うれ}嬉しんですよ。

どうやって^{いの}祈^{いの}ったらいいのかあんまりよくわからないんですが、
とにかく^{かみ}神さんのこと、^{まいにち}毎日^{おも}思っていますよ。

だから、イエスさん、^{かお}ジムです、^だ顔出しに^き来^きました。』」

^{うたが}いらぬ疑い^もを持ったことを^{はずか}恥ずかしく^{おも}思いつつ、^{ぼくし}牧師は^{ぼくし}ジムにいい
ました。「^{たいへん}そうですか。それは^{すばら}大変素晴らしいことですね。
これから^{いの}もいつでも^き祈りに^{くだ}来^{くだ}て下さい。」

